

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校園コード (代表者校園の市費コード)	
732665	
選定番号	A143

代表者	校園名 :	大阪市立墨江丘中学校
	校園長名 :	林 憲治郎
	電 話 :	06-6674-3612
	事務職員名 :	尾上 綾香
申請者	校園名 :	大阪市立墨江丘中学校
	職名・名前 :	首席・木下 祐介
	電 話 :	06 - 6674-3612

## 令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ	子どもたちの「心」に寄り添い、未来を生き抜くための教育活動の実践			
3	研究目的	1. コロナ禍も3年を終え、通常の学校生活が戻りつつある中、これまで様々な制限がある中で過ごしてきた子どもたちの心に焦点をあて、今後の人生を生き抜くために、教職員がどのような形で寄り添い、関わっていくべきかを考える。 2. 過去の自然災害や事件等において、事象後の3～5年後にPTSDの発症や、過度のストレスからの不登校や問題行動の急激な増加が起こっていることに着目し、発生当時に最前線で関わってきた方や現地の有識者や専門家に学びを受け、大阪市の不安を抱える子どもたちへの向き合い方を考えるきっかけにする。 3. PTG（心的外傷後成長）の視点にも注目し、心の成長、レジリエンスについて専門家を招いた特別研修や現地視察を行い、子どもたちの心の成長と未来を生き抜く力を後押しできるようにする。 4. 令和6年度に不登校特例校が設置されることもつなげ、課題のある子どもたちに対して、学校・家庭・地域が今後どのように連携し、子どもたちに関わっていくかを考えるきっかけにする。			
4	取り組んだ研究内容	いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSヨシック 9.5点 イト） 1) 『心』に焦点をあてた教育活動 ○心を育む ・命を大切にする（防災を通した教育活動（年3回）） 自然災害への備え、助けられる人から助ける人へ（4月） あげるからもらうへ、ボランティア活動について（7月） 日常の見直し、東日本大震災について（3月予定） 1年生（164名）を対象に、防災を切り口にした心を育む教育活動を行った。感想では様々な肯定的な意見があり、日常の見直しや、誰かを思いやる・人に感謝する感想も多くあった。アンケートでは『人の役に立ちたい』という項目が98%以上あり、自尊感情・自己肯定感の向上にもつながった。そのことでボランティア活動に参加する生徒が大幅に増え、地域とのつながりが深まった ○心のつながり 地域関係諸機関との防災ワークショップ（5月） 地域の子ども食堂＆寺子屋ボランティアへの参加（月1回） 各町会ごとに分かれての清掃活動（6月） ○東日本大震災を経験した有識者の『生の声』を聞く ・1・2年生を対象に、発生当時の状況や復興に向けての心の変化、様々な取組を紹介していただき、生徒への防災意識の向上や今後の学校生活や卒業後にかけて自ら考え行動するきっかけを作っていただいた。 ・教職員研修を行い、コロナ禍における生徒への心のケア、宮城県で震災後に取り組まれた《p4c》（子どものための哲学対話）について学んだ。 ・地域主体の防災訓練にアドバイスをいただくとともに、保護者・地域住民・教職員を対象とした講演会を開催し、災害発生時の危機管理や発生後の対応、心のケアについて伝えいただいた。 ○関東方面視察（横浜創英中学・高等学校、麗澤大学） ・横浜創英中学・高等学校では、チーム担任制や定期テストの廃止、校則の撤廃や独自の学びができるシステムなどが構築されており、生徒一人ひとりの課題や個性に応じた教育活動が行われており、今後の学校教育について今一度考える機会になった。 ・麗澤大学教授の大久保俊輝先生からは、不登校や課題を抱える生徒に対して、ご自身の経験をもとに、生徒の心にどう寄り添っていくか、道徳教育の在り方・勤徳として生徒の心を動かす重要性について話を伺った。 ○三重県視察（鈴鹿国際交流協会） ・JICAの事業である国際交流・支援活動を視察し、グローバルな人材育成について学びを受けた。 ○心のアンケート（1年生：1月） コロナ禍を3年終えて、現在どのような不安や悩みを抱えているか、中学校生活でどのように変化したかをアンケート調査し検証した。次年度以降の教育活動に生かしていきたい。			

5	研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	令和6年2月19日	参加者数	約29名	
		場所	墨江丘中学校			
		備考				
大阪市教育振興基本計画に示されている、 <u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u> および <u>教員の資質や指導力の向上</u> について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。						
<p><b>【見込まれる成果1】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>他府県の視察において、経験者・有識者の意見を受け、自校の教職員に学びを発信し、大阪市の教育活動に役立てる</p> <p>『検証方法』  教職員研修においてアンケートを作成し、今後の教育活動の参考になったという項目で肯定意見を80%以上にする</p> <p>〔検証結果と考察〕  特に横浜創英中学・高等学校の視察において、これまでの学校教育で当たり前とされてきた部分について、『学校と社会を結ぶところ』という考え方で全く異なる教育活動が行われていた。多様性・個性を大切にしていると考える社会の中で、当たり前とされてきた学校現場の伝統やルールについて考えさせられた。学校の管理体制、災害時の対応等、様々な課題はあるものの、今までの当たり前とされてきたことを改革し、これから社会で生き抜くには、何が必要で何が無駄なのかを考える時間になった。生徒の安心安全を確保することはもちろんだが、一人ひとりが多様な学び方を選択し、教員主導ではなく生徒自ら学び考えるシステムの構築が必要だと感じた。また教員自身もこれまでの伝統や慣習にとらわれず、不易と流行を常に考え、気づき・変化・進化していく必要があると実感した。</p>						
<p><b>【見込まれる成果2】</b></p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>コロナ禍で子どもたちが抱えてきた不安やストレスを検証し、教職員全体で学年取組・学校行事を通して実践を行い、心のケアや成長を促していく。</p> <p>『検証方法』  事前・事後にアンケートをとり、事後アンケートの際、事前アンケートより肯定意見、評価を80%以上向上させる</p> <p>〔検証結果と考察〕  「不安な気持ちになってしまうことがある」「イライラしたりかつとなったりしてしまう時がある」という質問項目において、70%の生徒がある、少しあると解答していた。東日本大震災後の発生後によったアンケートにも同じようなデータがでている。今回のコロナ禍は『心の大震災』とも言われており、小学校時代に様々な制約の中で過ごした生徒の不安やストレスがいかに大きかったことが分かった。今年度からコロナ禍が緩和され、中学校生活にも慣れてきたこともあり、事後にとったアンケートでは「将来の夢や目標を持っている」「学校に来るのが楽しい」「人の役に立ちたいと思っている」等の項目において90%以上の生徒が肯定的な意見を持っており、生徒自らやりがいを感じて取り組む教育活動を今後も持続発展させていく必要を感じている。</p>						
<p><b>【見込まれる成果3】</b></p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>東日本大震災を経験した有識者や専門家を招き、研修や講話を通して生徒・保護者・教職員の意識向上させる</p> <p>『検証方法』  感想用紙において、肯定的な意見・感想を8割以上にする。来場者数を300名以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕  生徒・保護者・教職員・地域住民、計300人以上に実際に経験された方の『生の声』を届けられたことにより、それぞれの意識向上、今後の備えや心構えについて考えるきっかけを作ることができた。大阪では都市部なので、東日本大震災や能登半島地震とはまた違う問題が起こることが想定されている。災害に対する備えや知識の習得だけでなく、日常を見直し日頃からの学校・保護者・地域との連携が必要不可欠になってくる。次年度もボランティア活動を含め、学校・保護者・地域が一体となって生徒に関わり、安心安全に過ごせる教育環境を構築していきたい。</p>						
6	成果・課題					

<p><b>【見込まれる成果4】</b></p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上  <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>東日本大震災を受け宮城教育大学が中心となった県内で行なってきたp4c（子どものための哲学対話）を学び、自校の生徒に実践・還元する</p> <p>『検証方法』</p> <p>生徒アンケートで心の安らぎ・成長につながったという項目において、肯定意見を80%以上にする  教職員アンケートで今後の教育活動につながったという項目において、肯定意見を80%以上にする</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>教職員研修で有識者を招き、子どものための哲学対話について学びを受けた。震災後に様々な悩みや不安を抱える中で、『対話』することで自分自身の心のうちを伝えることができ、悩みや不安の解決に向けての糸口になると学んだ。1年生では心の教育だけでなく、多くの行事や国際交流、探究学習やボランティア活動への参加など、活発な教育活動を行うことができた。その中で「以前に比べて自分の考え方や思いを表現できるようになった」という質問項目において95%以上ができるようになったと解答しており、今後も複合的な教育活動を展開していくことが心の成長につながると感じた。</p>	
<p><b>【研究全体を通した成果と課題】</b> 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>東日本大震災発生から3～5年後の子どもたちの心の変化について調べていく中で、3年間続いたコロナ禍の様々な制約も同じように影響するのではないかと考え研究を行った。不登校生徒の増加や心をふさぎこんでしまう生徒の増加において、いかに人と人とのつながり、その中の対話や心を動かす教育活動が大切かを学ぶことができた。教育環境の改善が求められている中、目に見える環境だけでなく、システムや教職員の意識改革など目に見えない部分での意識・改善が求められている。多種多様な学びを構築するだけでなく、問題なく登校できている生徒にも様々な悩みや不安を抱えていることを常に意識しながら、生徒一人ひとりの心に寄り添い、関わっていくことが大切であると感じている。そのためには学校だけでなく、保護者・地域も一体となり様々な視点から教育活動を行うことが必要不可欠だと感じた。次年度も研究・実践を重ね、気づきや学びを形にし、発信していきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>〔代表校園長の総評〕</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>東日本大震災での教訓と経験を風化させないためにも、これから訪れるとしている「南海トラフ地震」に対しての意識と備えに対する研究、予防教育が行えた。特に本校では「いのち」をテーマに対する取り組みの中で社会問題となっている「自死」について扱う背景として「防災」で自分に対する「いのち」他者に対する「いのち」について考える取り組みを行った。有識者、経験者の言葉は重く、生徒の心を動かす時間となった。さらに、人権教育と絡め、人権防災、人権いのちの教育をテーマに本市の課題解決に向けて、模範となる教育活動の展開を今後推進していきたいと考えている。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>	